
魔法少女リリカルなのは StrikerS 空ヲ舞ウ白キ自由

白銀の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 空ヲ舞ウ白キ自由

【Nコード】

N4053Z

【作者名】

白銀の翼

【あらすじ】

ユニウス戦役終焉から一年経ったC・E・75。

あれから地球はナチュラルとコーディネイターとの解り合いを進めると同時に、戦火の爪痕を少しでも癒そうと、各国で協力し合っていた。

だが、それも中々進まなかった。

世界各国とプラントに所属不明艦隊とモビルスーツ部隊が現れて世界に小さな混乱を起こしていたのだ。

そんな中、ザフト軍の隊長と特務隊に着任したキラ・ヤマトは、あ

る宙域にて艦隊が停泊しているという情報を得て、偵察兼破壊の為に一人出撃するが。

一方、ある魔法世界ミッドチルダでは、新暦75年の春に発足したある試験部隊と、ある次元犯罪者との戦い、その事件の名前がその首謀者の名前になる程の事件が起きようとしていた。

自由ノ消失(前書き)

自信無い……

自由ノ消失

”ブレイク・ザ・ワールド”から始まりメサイア攻防戦まで続いた大戦、”ユニウス戦役”から数ヶ月。

世界はカガリ・ユラ・アスハが治めるオーブ連合首長国とラクス・クラインが治めるプラント理事国が筆頭となり、着実に復興への道とナチュラルとコーディネイターの解り合いを進めていた。

だがその一方で、地球や”プラント”では大きな大戦は起きてはいないが、小規模な混乱は起きていた。

地球各地と”プラント”各地で所存不明の艦隊やモビルスーツ群が現れて、各国を襲撃したからだ。

各国は復興を進めると同時に連携を取り所存不明艦隊を撃破し、目の前の火の粉を振り払う事も同時進行する事にした。

デブリ帯

無数の星が瞬く漆黒の空間に、無数の岩塊や残骸が漂っている中、一機のモビルスーツが辺りを見渡していた。

純白の四肢、黒と青のツートンカラーのボディ、黄金の胸部砲口と関節部と両手、両腰部に灰色とビームサーベルの柄、そして背中に背負う八枚の深蒼の翼。

自由の大天使『ZGMF-X20A』ストライクフリーダム”
である。

「おかしいな……」。

確かにこの宙域で所属不明艦隊が停泊していたという情報があったのに何故誰もいないんだ？」

”ストライクフリーダム”の胸部コックピットで操縦するキラ・ヤマトは一人ごちる。

自らが所属している超大型空母”ゴンドワナ”を旗艦とするザフト軍月軌道艦隊 戦艦”ミネルバ”に、所属不明艦隊がこのデブリ帯で怪しい行動をしている、という情報を得て、キラ自らが出撃したのだが、結果は雲隠れである。

だがその雲隠れでも怪しい。

通常なら強大な軍隊、それも二つの大戦で英雄の一人と数えられている人物と愛機ならば急いで逃げるが、その際に何か証拠を残したりする事がある。

だがそれが一切無いのだ。

まるで最初からそこにいなかったように。

「念のために、もう少し調べてみるか……」

そう言つて操縦桿スティックを動かした時だった。

ガクンと、機体が揺れて何かに吸い込まれ始めたのだ。

「な、何!?!」

慌てながらも原因を探るべく、メインカメラを動かした時だった。

そこにあるのは、どんな星や月よりも強い輝きを放つ光。

その光に吸い込まれていつている。

「チイツ!」

キラは急ぎフットペダルを強く踏み、ブースターを全開にするが構わずに機体はどんどん吸い込まれていく。

そして、機体が光に入っていくと同時に全てのシステムがダウンしていく。

武装も、装甲も、推進力も、ハッチも全てが使えなくなっていく。

そして

「うあああああ!?!?!」

キラの断末魔と共に、機体は光と共に消え去った。

邂逅ノ時(前書き)

上手く出来てるだろうか……？

邂逅ノ時

光に吸い込まれて数分後

「……………ん、うう……………」

ここは……………?」

偏光グラスで作られたバイザーを持つヘルメットの中で、キラはゆつくりと目を覚ますと目を数回瞬きさせて意識を覚醒させる。

薄暗くて余り見えないが感触から、未だに愛機のコックピット内にいるというのが解る。

「“フリーダム”の中、か……………」
取り敢えず今の状況は、と……………」

コックピットの中は変わらず薄暗いが、手慣れた手つきで機体の電源を入れると前にキーボードを出し、音楽を奏できるように叩く。

ザフトの紋章^{エンブレム}が目の前の画面に現れ、OSが開かれる。

Zodiac Alliance of Freedom Treaty

MOBIL SUIT NEO OPERATION SIS
TEM

Generation
Unsubdued

Nuclear
Drive
Assault
Module

Series SD 100-09 SF/IJ 01-34
152

Z.A.F.T

G.U.N.D.A.M Complex

いつもと同じ、ガンダムのOSが開かれると計器に光が点り、VP
Sが展開されると同時にモニターやカメラが映る。

だが、カメラに映った光景を見て、キラは愕然とした。

「な!？」

僕はさっきまでデブリ帯にいた筈なのに!！」

画面に映ったのはさっきまでのデブリ帯ではなく、日光に当たり白
銀に輝く雪山だったのだ。

いつの間に地球に?と思ったが空に見える無数の惑星らしきもので、
地球ではないのが解る。

取り敢えず、今は驚いてばかりはられない。

キラはハッと意識を取り戻すと、再びキーボードを叩く。

「CPG設定正常、ニューラルリンケージオン濃度正常、メタ運動野パラメータ正常、原子炉正常、全システムオールグリーン……。オールウェポンズフリー？」

画面に映る正常を示す文字を見て安堵の息を吐くキラだが、ある一文に釘付けになった。

この文字が意味する事は、全身に備えている全ての武装が、ドラグーンも漏れずに使えるという事だ。

だが、これだけではまだ信用出来ない。

「……やってみるか」

キラは操縦桿を動かし、左上の翼からドラグーンを一機射出して、メインカメラの前で止めると、上下左右と動かし、試しにビームを一発上空に放つ。

翼端から放たれた翡翠の光弾は、空の彼方に消えていった。

「ドラグーンも使えるか……」

ともかくこれで解ったが、後はこの地に人間がいるかだ。

ここが未開の地なら、キラはここで愛機と共に、愛機に看取られながら死に逝くしか無い。

人が住んでいるなら帰る方法を見つけるまで現地の人達に紛れて住むまでだ。

「人は、と……」

何処かに向けて飛行を始めよう、膝を折り曲げながら周りを見渡した時だった。

ドオオンー！！

「ん？」

何かの爆発音をスピーカーが捉え、キラは顔を爆発した方向である右方のサブカメラの方を向き、何倍かズームにして見てみる。

何かが爆発した証拠である黒煙が上がっているが、煙が払われるとその全貌が明らかになる。

そこにいたのは、数機の”ウインダム”と、黄金と桜色の光を纏った見た事も聞いた事も無い武器を持った女性だった。

「……は？」

思わずマヌケな声が出てしまうが、気を取り直して見てみる。

”ウインダム”の装甲表面は、女性達の攻撃でついたのか僅かな細かい窪みから丸くて同様の小さな窪みがあるが、その殆どを左手に持った青いアンチビームシールドで防がれている上に、攻撃が入ったとしても内部まで攻撃が入っていない。

更にウインダムもただやられているばかりではなく、右手に持ったビームライフルやビームサーベルで迎撃に出ているが、それが灼熱の温度を持つというのが解っているらしく懸命に動いて躲していく。

だが、このままではやられるのは時間の問題だ。

「……待って下さい。

今助けに行きます！」

キラは機体を右方向に向けさせると、機体の瞬発力と推進力を瞬時に全開にし、その方向に向かっていった。

時は少し遡り、時空管理局古代遺失物処理管理部機動六課は、ヴァイス・グランセニツクが操縦するJF704式のヘリで初任務に赴いていた。

機動六課に来た初任務とは、ベルカ自治区にある山岳地帯にてロス・トロギアを乗せたりニアレールが、ガジェットに襲撃に合い、そのコントロールを奪われ、暴走してしまった。

そのガジェットを殲滅すると同時に、リニアレールの暴走を止めロス・トロギアを回収せよ、といういきなりハードな初任務である。

「いきなり新デバイスでのぶっつけ本番になっちゃったけどおっかなびっくりじゃなく、ズバッとやっつけちゃおう！」

「「はい！」「」」

「……………はい！」

新人のFW陣の内の三人、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアルは勇壮な返事を返すがただ一人、キャラ・ルシエだけが何かに怯えている様な声で返事を返す。

三人も勇壮な返事の裏には緊張が混ざっているが、キャラの場合はそれに相まってある自身の問題がある。

キャラは自身のレアスキルである”竜召喚”に成功した事が無いのだ。

ひよつとしたら暴走してしまうかも知れないという不安が、キャラの心を支配していた。

「キュル……………」

キャラの使役竜であるフリードリヒも、主の心境を察したのか心配そうな声で鳴く。

「キャラ」

「は、はい」

なのはもそれに察したのか、キャラに近付くと視線を合わせて笑みを浮かべる。

「皆とは通信で繋がってる。」

ピンチになれば私やフェイト隊長、FWの皆がいるから、心配しなくて良いよ」

「……………はい」

安心させる様笑みを浮かべて言うなのはにキャラは少し心が軽くなつたのか、少々ぎこちないが笑みを浮かべる。

「よし。」

じゃあ、行ってくるよ。

スターズ01、高町　なのは、行きます！」

出撃合図の声を言うとなのはは開かれたハッチから制服のまま、飛び降りると途中で愛機”レイジングハート”を起動しバリアジャケットを纏うとフェイトと合流し真っ直ぐ空に展開しているガジェット群に向かっていった。

数分後、二人の隊長達により空に展開していたガジェットの殲滅が順調に行われている中、ヘリは無事にリニアレールの上に着く事が出来た。

「さあ〜て新人共！

隊長さん方が空を抑えているお陰で無事に出撃地点に着いたぞ。準備は良いかあ!？」

「はい!」

「スターズ03、スバル・ナカジマ」

「スターズ04、ティアナ・ランスター」

「「行きます!」」

出撃合図を言うと同時に、二人はそれぞれの愛機、”マツハキヤリバー”、”クロスミラージユ”を起動させてリニアの屋根に降り立つ。

次は年少組、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの番である。

エリオの方は落ち着いているが、キャロの方は余りの高さからそれとも不安なのかは定かではないが心配そうな表情をしている。

エリオはキャロに手を差し出す。

「……一緒に行こう」

「……うん!」

その一言で、キャロの表情は一気に花開く様に明るくなる。

「ライトニング03、エリオ・モンディアル!」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエ!」

「「行きます!」」

二人は同時に叫ぶと、同じ様にヘリから飛び降りていくと愛機”ストライダー”、”ケリュケイオン”を起動させバリアジャケットを纏うとリインの現場指揮により四人合わせてリニアール攻略を始めた。

それからFW陣は色々とアクシデントを起こしながらもリニアールを占拠していたガジェット群を殲滅、ロストロギア”レリック”の回収に成功し、後は六課への帰還となった時だった。

「ロングアーチスタッフよりスターズ01ライトニング01へ！！」

未だ飛行魔法で浮いている隊長陣とスバルの作り出した魔法、ウィングロードでヘリに向かっているFW陣の目の前にロングアーチの一人であるシャリオ・フィニーノ、通称シャリーが切羽詰まった表情で映ったモニターが出て来た。

「十二時の方角より新型のガジェットらしき物がそちらに向かっていきます！

その数、十！！」

その知らせが六課メンバー全員に入り込み、理解させると一気に緩んでいた気持ちがあまた引き締まる。

FWには戦慄が走るが、隊長陣は余裕の笑みを浮かべている。

この辺は経験の違いなのか、隊長陣は予想していたようだ。

だが、それが間違いだったというのはすぐに明らかになる。

最初は空に塗した胡麻の様だったが、時間が経つに連れてその全貌が明らかになっていく。

白と青を基調としたボディ、ヘルメットを被った様な頭部、右手には黒い一挺のライフル、左手には青い三角形のシールドを装備した、全高約二十メートルの巨大な人型兵器。

なのは達の最も良く知っているある世界、その世界に最も近く、そして最も遠くにある世界で使われ、量産されているモビルスーツの一種、”ウインダム”である。

「……………これはっ!?!」

「……………FW陣の皆は急いでへりに戻って隊舎に帰還して!」

「け、けどなのはさんとフェイトさんはどうするんですか!?!」

「私達は後詰めをしてこいつらを足止めをする!

早く戻って!!」

「……………は、はい!」「……………」

鬼気迫る勢いの隊長陣からの命令を聞くと、FWは急ぎへりへと帰

還し、六課隊舎へと向かっていった。

へリがその姿を消し、その場には”ウィンドム”群となのは、フェイトのみが残った。

「お友達になりたい、っていう顔じゃないね……。
行くよ、なのは！」

「うん！」

それぞれが得物^{デバイス}と武装を構えて、お互いが中空でぶつかり合った。

数十分後

「はあ、はあ、はあ……」

「き、効くは効くけど、この程度か……」

フェイトの独白通り未知の機体である、”ウィンドム”群には魔法は通用するが、その殆どは左手に装備したアンチビームシールドにて殆ど無力化され、装甲表面に当たった時は、魔法の痕の窪みが僅かに出来るくらいだ。

魔導師、騎士はそれぞれ小さなカテゴリに入れると分けられるが、人間という大きなカテゴリに入れると一緒にになる。

今は例えるなら、まさに象に向かう蟻の様な光景だ。

だが当然、”ウィンドム”達も魔法による攻撃により損傷しているが上記の通りで装甲表面に傷が着いたくらいで内部までには至っていない。

更にただやられているだけでなく、翡翠のビームと桜色のサーベルによる反撃をしている。

更には連携も取るのでかなり厄介だ。

なのは達も灼熱を纏っているという事を直感的に解っているらしく、躲していくが動きはかなり複雑でオーバーだ。

その上に、なのは達にはある問題があった。

「はあ、はあ……。」

フェイトちゃん、大丈夫？」

「何とかね……。」

けど、リミッターをかけてるから、これ以上は流石に……。」

そう。部隊保持の為に、二人を始めとした隊長陣には魔力リミッターが掛けられる。

機動六課の様に優れた魔導師を何人も所属する為の裏技だが、解除

権限は限定された対象の上司にある。

その上に回数には制限があり、回数を補填するには申請が必要なものだ。

なのは今のままでも都市を破壊出来るレベルだが、場所や状況が余りにも違う。

更に、今ここで限定解除を申請する時間は無い。

思案に耽る二人だが、ここは戦場。

敵がそんな時間等与えてくれる程優しくないし、慈悲もある訳が無い。

二人のその思案を隙と判断し、八機の”ウインダム”が二人を四方八方取り囲んだ。

「はっ………！」

「しまった！」

悔しげな声を出す二人だが、もう既に時が遅い。

八機がそれぞれ右手に持つビームライフルを二人に向けて、銃口の奥に万物に平等に死を与える光が宿る。
だが、今にも発射されようとしたライフルの銃身を西の上空からほぼ同時に降り注いだ八つの翡翠の閃光が過たず貫いた。

「な……………!？」

「今度は何!？」

驚愕した二人と”ウイングダム”群はそちらに視界を向け、目を見開きまた動きを止めた。

視界に映ったのは、白い装甲、両手に握る二挺のビームライフル、黒と青のツートンカラーをした細身のボディ、黄金の輝きを放つ関節部と両手と胸部砲口、黄色い二つ目のセンサー、左右対象の四本のアンテナ、そして何より目を引いたのは背中に抱く深蒼の八枚の翼。

地上の人間達に裁きを下しに来た天使にも見て取れるその機体に、誰もが釘付けになった。

そして、その機体から声が発せられる。

「そちらの方々、聞こえますか？

こちらキラ・ヤマトです！

援護します、至急現空域から撤退を！」

最も近く、そして最も遠い異界に住む者同士の出会いだった……。

邂逅ノ時（後書き）

ちよつと書き直してみました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4053z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 空ヲ舞ウ白キ自由

2011年12月14日21時47分発行